



TITLE:

<學界展望>秦漢時代の簡牘研究

AUTHOR(S):

角谷, 常子

CITATION:

角谷, 常子. <學界展望>秦漢時代の簡牘研究. 東洋史研究 1996, 55(1): 211-224

ISSUE DATE:

1996-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154993>

RIGHT:

秦漢時代の簡牘研究

角谷常子

一 研究状況と問題點

近年、ますます質量ともに豊かになりつつある簡牘資料をめぐって、研究上の問題點と今後の課題及び新たな視角等について述べたい。

簡牘資料は、墓中出土簡と邊境出土簡の二つに大きく分けられ、各々死者の爲の副葬品、官署における業務活動の遺物という、全く異なる性格をもつ。この内、墓中出土簡はその性格上、副葬品リスト（遺策）や書籍類が多く、あまり歴史資料としてとりあげられることはなかった。しかし、雲夢睡虎地秦簡の發見以來、張家山出土の漢律、奏讞書等、次々に發見された簡牘は、數の上こそ邊境出土簡に比すべくもないが、その内容は法制史はもちろんのこと、官制、經濟、家族に関する研究にも大きく寄與するものであり、多くの研究成果を得ていることは周知の如くである。一方、邊境出土簡は未發表のものも含めて敦煌漢簡は約一萬八千點、居延漢簡は約三萬點にものぼる。邊境の軍事據點という特殊な地域の出土ではあるが、漢代の行政組織下における生きた活動の記録であることにかわ

りはない。従って、そこには軍事以外の、例えば人事、俸給、訴訟、賣買、考課、行事といった様々な方面の情報が含まれているのである。邊境出土簡の研究史及び研究成果については贅言するまでもなからう。このように質量ともに充實しつつある簡牘資料は、もはや古代史研究において無視できない存在であり、それは様々な分野における研究に簡牘資料が利用されている現實をみても明らかである。ただ、これら簡牘資料を扱うにあたっては留意しなければならぬことがある。それは資料の性格をふまえておくということである。これは何も簡牘資料に限ったことではなく、文獻を扱う際にもいえることで、今さら言い立てるまでもない。しかし、特に邊境出土簡の場合、軍事據點における活動の記録という、周知の基本的性格をもう少し意識すべきではないかと思うのである。それは、思わぬところで誤った解釋をしていることがあるからである。

簡牘を讀んでいると、簡単な字であるのにもうひとつ意味がしっくりこない、とかふだんは氣にもとめずに讀み流しているような字に立ち止まらされたり、あるいは復數の語が同じような内容をもつが、どのような區別があるのかわからない、といった類のことをしばしば経験するのである。例えば「發」。文書の授受に関わる帳簿によくみられる字だが、これは「發信」ではなく「開封」の意である。もう一つ「定」について。郵書遞送の記録の中における例をあげてみよう。

北書三封合板板檄各一

其三封板檄張掖太守章詣府
合檄牛駿印詣張掖太守府牛掾在所

九月庚午下鋪七分臨木卒副受卅并卒弘鷄鳴時當曲

(以上第一、二欄)

卒昌付收降卒福界中九十五里定行八時三分實行七時二分

(以上第三欄)一毫・四

これは臨本際から收降際に至るまでの郵便送達記録であるが、ここには「定行」と「實行」という言葉がみえる。「定行」はこの區間を行くべき定められた時間」で、「實行」は「實際にかかった時間」と理解するのが常識的なところであろう。しかし實は、實際にかかった時間を示すのが「定行」なのである。つまり定は「一定の」とか「規定の」という意味ではなく、差引などのいろいろな過程を経た結果、實際に「確定した」という意味なのである。このような「定」は漢簡において「定負」「定得」「定出」「定入」というように常用される。このように、常識的な判断で読むと思わぬ誤讀をしてしまうことがある。さらに、同じく文書の種類を示す案、課、刺、卷などの語のように、その具體的な内容を知ろうと文獻を探しても答えを見出すことが難しいということも少なくない。

このような現象は資料のレベル、あるいは質の差に由來する。つまり、『史記』、『漢書』のような中央及び郡レベルを中心とし、日々ルーティンワークがくりひろげられる地方官衙の世界など、ほとんど視野にいれていない史料と、縣レベルを中心とした生の日常業務活動記録との差が、使用語彙の差、意味の差となって現われているのである。簡牘を読む際には、この點に注意しなければならない。

この種の誤りを犯さないためには、やはり從來から行われてきた二つの方法しかないだろう。まず、簡牘資料においてその字がどのような意味で用いられているかを歸納的に解明することである。簡牘が反映している世界での用法は簡牘の世界でしか知れないこともある。歸納法は字の意味を探るだけでなく、文書形式の解明等、

簡牘研究の上で有効かつ必要不可欠の方法である。ただ、これにはある程度のサンプル数が必要であり、その點で十分解明できない場合も少なくない。そこで今ひとつの方法、即ち文獻史料の活用が必要となる。簡牘には先に述べたように、思いもよらぬ意味をもつ場合や不明確な語彙も多い。しかしこのことは簡牘には特別な語彙や特殊な用法をもつ字が使われている、ということでも、資料の性格が違うのだから、文獻史料を探しても見つからない、ということでもない。注意深く読めば、文獻史料の中にも同じような意味や用法をもつて現れているのである。ただ、それらに出会う頻度が少ない為か、読む側の意を用いるところが異なる為か、氣附かず、あるいは見落してしまっていることが多いだけである。先の「發」も「定」も文獻の中にちゃんと簡牘におけると同じ意味で用いられている例がある。要するに、簡牘資料を読む際には安易な類推ではなく、やはり文獻史料を精査すべきであることを再認識したのである。これは邊境出土簡に限らず、慣れ親しんだ史料と質的あるいはレベル的に違ったものを読む時にはいつも留意すべき點であろう。

以上のように、簡牘の讀解に際しては、その性格上、常識的判断のみに頼っていると思わぬ誤りを犯す恐れのあることを述べたが、資料の性格ということに關してもう一点觸れておきたいことがある。それは今扱おうとしている簡が實際に發信された正式文書か草稿かコピーか、を知ることである。これは記載内容の理解にも影響を及ぼす問題であるし、また文書や帳簿がどのように生み出され、移動し、處理されるのかといったシステムの解明と密接な關係にあるのである。

さて、この點に關しては從來、居延漢簡を用いて研究が行われて

きた。

大庭氏は元康五年詔書冊という冊書を復元し、詔書が御史大夫↓丞相↓郡太守↓都尉↓候官↓候と「行下之辭」を付け加えながら傳達されてゆく様を明らかに示された。また永田氏は帳簿についてタイトルとそれに對應する内容簡を比定して各々の書式を見定め、さらにそれらの帳簿がどのように移動するか（あるいはしないのか）を考える、「古文書學的研究」を行い、様式分類によって多くの斷簡零墨の利用を可能にされた。

こうした研究を通して、文書の性格を判断する上でも多くの成果が得られてきたにもかかわらず、やはり依然として不明確な點が多いのも事實である。しかし、居延新簡（一九七三、七四年發掘）の出現という漢簡研究の第二の節目を迎えた今、この方面でも新たな展開が期待できるのではないだろうか。ただ、出現といっても今のところ公表されているのは甲渠候官と第四隴出土簡を中心とする約一萬點で、それを上回る數の金關出土簡は未發表であるが。新簡の意義はまず第一に數が増えたことに伴い、内容も豊かになったこと。第二に文書庫とみられる部屋（F三）が發掘されたこと、即ち廢棄物ではなく保管を目的とした簡牘がみられた、ということである。内容としては從來知られていなかった帳簿の存在が多數確認されたこと、また多くの冊書が發見されたことも関連して、効状や爰書といった法制上關係のまとまった資料が得られたことが特筆される。では、新簡を得た今、上述の問題を説明するために、どのようなことができるだろうか。

文書や帳簿の移動のシステムを説明するためには、永田氏が帳簿において行ったように、まず文書や帳簿のもつ様々な形式を明らかに

にすることが必要であらう。文書の場合でも「敢言之」があれば上行文書、「承書從事下當用者」は執行命令を意味するので下行文書、といったように、文書の種類や内容によってきまり文句がある。新簡において得られた爰書や効状にもこれらの文書がもつ定型句がある。新簡は文書が多いという點でこの方面の研究には貴重な資料を提供しているといえよう。このような文書に特有の語や句あるいは書式を發見することは帳簿の場合と同じく、その簡がたとえ冊書の形になっていなくとも、どういった性格の文書であったかを知ることが手になるのである。

さらに、文書の作成から發信に至る手續き、あるいは受信とその處理がいかに行われるかということも知らねばならない。これは一見瑣末な問題のようにであるが、簡の性格を知るためには重要なことである。具體的に言えば、誰がどのような簡にどのような字で下書き、控、發行文書を書いて、どのように發信されるのか、ということである。實際に簡牘をながめていると、書き方（謹直な隸書から草書まで、はば廣いくずし方、字の間隔の大小等）や使用される簡の形状（一行書き、二行書き、匚等）にもいろいろあり、それらにどのような區別があったかが不明確で、従ってそこに書かれた内容を扱う際にもどの程度の信用がおけるのか、判断しかねる場合すらあるからである。草書體で書かれたものは控か草稿とされている（控と草稿ではかなり性格が違うが）が、草書までいかになくともかなりくずした字もあり、正式な文書では一體どの程度までくずし得るのか等、明らかにすべき問題があると思われるが、こうした問題はほとんど論じられていない。現在は、なんとなく雑な感じだから正式な文書ではなさそうだ、といった程度の判断しかできない状況

なのである。

以上、いくつか解明すべき點をあげたが、これらを考える際には簡文の形式や内容だけでは限界がある。二萬點、三萬點とはいえ、多くの斷簡零墨を扱うのであるから、それ以外の情報、つまり簡そのものや文字からも情報を得るべきである。この方面に關しては從來の研究ではほとんど扱われてこなかったが、近年になってようやくこのような視角をもった研究が現われるようになった。最近發表された、富谷、榎山兩氏の論考がそれである。これらは簡牘を實見調査し、簡の側面の切れ込みや厚み等について新たな知見を紹介し、その意味するところを明らかにしたものであり、特に榎山氏の刻齒に關する研究は從來の解釋を正す點も多い。このような方面の研究は今後も進展させるべきではあるが、残念ながら實物をもたない我が國においては、いつでも簡単にできるわけではない。では、記事内容以外で、寫眞を使つて得られる情報はないだろうか。それは文字以外にはないであろう。ただ、文字にしても墨色や微妙な筆遣いなど、寫眞では判断しかねる場合もあるが、筆跡ならば寫眞でも可能ではないだろうか。そこで次に筆跡について考えてみることにしたい。

二 筆 跡

簡牘研究において、筆跡はしばしば問題になる。それは冊書の復元だけに止まらず、帳簿についてもいえる。一本の簡でも上段と下段の記載の手が違ふ場合は、途中で書き手がかわつたという特殊事情を除けば、帳簿の性格上、當然その部分は書き手がかわるべき箇所だったのか、でなければ記入場所の違い、あるいは時間差を考え

ねばならない。帳簿作成の仕方にも關わる問題なのである。ではこの他に筆跡の研究はどのようなことに役立つだろうか。

まず、書記官の關わる業務範圍がわかる。簡の表裏には豫某や令史某といった「書記官の署名」とされるサインがある。一人ならばわかりやすいが、二人あるいは三人の名が並ぶこともあり、誰が實際に書き、他の人はどういう役割を果していたのかは全く不明である。複数の書記官があらゆる事柄、例えば穀物出納も爰書も休暇の記録も戍卒の作業記録も、すべてを扱っていたのか、あるいは役割分擔があつたのか。同一人の手になる文書や帳簿を集めてみると、少なくとも彼が關わる業務の範圍は判明しよう。

しかし、なによりも重要なことは文書の移動システムの解明に役立つことである。もし、候官のある書記官の手になる文書や帳簿が都尉府で發見されたならば、送り状などがなくても移動が證明されるからである。ただ、言うは易いが實際に筆跡で何か言おうとするのは甚だしい。これまで、文字そのものに關しては前述のような程度のこと指摘されているだけで、これといった成果はない。

筆跡を特定することの困難さは、筆跡が指紋のように「終生不變かつ萬人不同」でないことにある。人間の運動の結果であるから、極端に言えば書くたびに變るのであり、時間の経過や精神狀態によつても左右される。試薬をおとして反應をみるとか機械で測定できるものではないのである。しかし、同一人の筆跡にはかなりの恒常性があることもまた確かで、ある程度の文字數を比較検査すれば異同鑑定は可能であるという。そこで、筆跡の不變性が成立する條件とされるものを紹介すると、①たくまずに書いたものである。②同書體で書いたものである。③同一年代に書いたものである。④記載

時における筆者の身体及び健康状態に著しい差異がないこと。の四點である。犯罪捜査の場合ならば犯人が意圖的に筆跡を變えようとしたり、異常な精神状態で書くことがあるが、簡牘資料の場合、筆記者は一定の書式にのっとって日常業務をこなす専門の書記官であるから、①と④はまず問題なからう。③は年齢とともに筆跡に變化のみられることをいうのであるが、一般に二十歳を過ぎると安定し變化も少ないとされ、これも除外してよい。問題は②である。書體が變ると鑑定が困難であるということは、同一人物でも隷書で書いたものと草書で書いたものを判定するのは難しいということになり、従って草稿、コピーは草書であるということを筆跡のみで證明するのは不可能かもしれない。

さて、具體的な鑑定の方法であるが、形態、筆壓、筆勢、筆順、配字等について行われる。このうち、筆壓はなかなか故意にも變えられない、つまり個性が残りのやすいもののようにだが、残念ながら木に書かれていてしかも寫眞となつては、お手上げである。となると、簡牘の場合は残る三點が比較のポイントとなる。次に實際の比較の仕方であるが、いかなる筆跡の間にも類似點と相違點がともに存在するので、各々の價值を評價することが重要だという。具體的に言えば、AとBが同筆であると判断する場合、類似點についてはその希少性が高いこと、類似する數が多いこと、相違點についてはそれが有力なものでない、無視し得るものであることを證明することが必要とされている。が、簡牘の場合、これがなかなか難しい點がある。まず類似點の希少性についていえば、ある字が似ていても、同じような書き癖をもつ人が他にもいるかもしれないので、希少性を證明しようとすれば、その字に關してできるだけ多くのサン

プルを集めた上で、今問題としているサンプルの書き癖そのものが希少だといわねばならない。そこで集めるサンプルは當然、みな違う人が書いたものでなければならぬが、簡牘の場合、誰が書いたかわからないもの、つまり同一人物が書いたものが混じっているから筆記者が重ならないようにサンプルを集めなければならない。また、同じ字でも書體の異なるものはサンプルとして入れられないが、どの程度までを隷書あるいは草書と認めるか、といった問題もある。サンプル集めという作業からしてかなり慎重に行う必要がある。この問題は相違點が無視できるか否かを判断する際も同様である。

この他、これらの判断をする場合、書の素養も必要ではないかと、實際に鑑定の作業を試みて感じられた。というのは、例えば、一方でははねているのにもう一方ははねていないという、形態上の相違があつた場合、書の素養の全くない筆者にとっては、それが無視し得る程度の相違かどうかの判断が難しいのである。書の心得のある人ならば、全體の配字あるいは周囲のスペースからみて自然な筆の流れであつて全く氣にならないようなこともひっかかつてしまうのである。

筆跡鑑定には以上述べたような困難があるが、せっかくの情報源である。なんとか有効に利用しなければならぬ。サンプル集めもできていないような状況の中で、嚴密な鑑定とはほど遠いものではないが、新簡を手がかりにすれば、ある程度可能なのではないだろうか。實は、素人でも筆跡の比較ができるかもしれないと考えたのは、新簡の寫眞を見た時であつた。先述のように、新簡には冊書が多い。つまり、同一人の手になるまとまった資料が提供されてい

るということである。ある人物の筆跡がきちんと確定できれば、即ち一つのしっかりとしたもののさしを作れば、それをもって他の資料を測ることもできよう。この際、もののさし作りができるのではないが、そう思ったからである。ともあれ、上述の鑑定のポイントを念頭におきつつ、ここに敢えて素人の筆跡鑑定を試みたいと思う。

(以下に引用する簡牘資料は全て居延新簡のF三の番號のものである。)

まず最初にとりあげたいのは、「候粟君所責寇恩事」の冊書である。これは爰書の研究を大きく進展させた冊書として有名であるので、今さら解説するまでもないが、行論の都合上若干觸れておく。これは甲渠候の粟君と居延縣在任の寇恩との間におこった商賈をめぐるトラブルに關する冊書である。まず甲渠候官から居延縣に訴えがあり、縣は郷に傳達して寇恩を取り調べさせた。冊書はA(F三・一二)。以下F三は省略、第一回目の寇恩の爰書。B(三・二六)、第二回目の寇恩の爰書。C(元・三三)、郷から居延縣に宛てた送り狀。D(四・三三)、居延縣から甲渠候官宛ての文書、の四つの部分に大きく分けられる。さて、問題の筆跡であるが、私見によればAとDは三人の手になるのではないかと思われる。それはAの筆者、B・Cの筆者、Dの筆者の三人である。BとCが同筆であることは一見して明らかであろうから検討は省略する。さて、AとBはほぼ同じ文章で、かつかなりの長文のため比較しやすいので、この兩者からみてみることにする。ここでは類似點より相違點の方が目につくので、それをいくつかあげてみよう。①君字(圖1)。Aでは四畫目が一畫目の横線より上につき出るが、B・Cは出ない。②言偏(圖2)。口の部分がAでは左下方に流れるが、B



圖 2



圖 3



圖 1

が、二畫目は下から打込んで右上方へ上げてい。この他、爲、延字も明らかに筆法が異なる。一方、これが特徴的に似ているという類似點は見出せない。これから、AとB・Cは異筆とみてよいと

4(A)

29(C)

7(A)

29(C)

圖5

2(A)

21(B)

8(A)

25(B)

1(A)

31(B)

36(楊)

圖4

は流れない。③渠字(圖3)。B・Cでは水と巨と木の三部分から成るが、Aでは巨の一番下の横畫がなく、縦畫と木の縦畫がつながって一畫になり、従って兩者の筆順も異なる。④恩字(圖4)。Aではしたごろの三、四畫目の點が一點になるが、B・Cは二點である。⑤ぎようにんべん(圖5)。一、二畫目をAでは二畫とも普通に打込んで左下方へおろすが、B・Cは一畫目は左下方へおろす

18(A)

25(B)

34(D)

20(A)

28(B)

34(D)

圖6

思う。次にA、B・CとDであるが、Dはわずか二本でしかも簡面が荒れてみえない字が多く比較が難しい。が、いくつかの異同は指摘できる。「居延」と「證」(圖6)についてはAと異なり、むしろB・Cの方に近いが、渠字はB・Cとは違う(圖3)。またAとDの類似點は月字や數字のような筆畫の少ないもので、類似というより明確な違いが認められないという程度のものである。B・CとDの類似の程度も同様ではあるが、同時に明確な相違點も一箇所のみである。従って、AとDは異筆として誤らないと思われるが、B・CとDに關してはやや不安が残るものの、ひとまず異筆としておきたい。假にB・CとDが同一人の手になるとしても、Dの字の太さがほぼ一定であることをみると、筆が變っていることは確かであろう。ちなみにこの冊書についていたと思われる楊は、恩、君字を根據にAと同筆であると考えている。

さて、Aの筆記者であるが、甲渠侯官の書記官たる「譚」ではないだろうか。それはF三・毛の諸簡とAが同筆であると判断できそうだからである。この毛の蓋簡はすべて甲渠侯官發信の上行文

渠

51A

45A

辛

41

渠

48A

敢言之

38A

敢言之

45A

敢言之

53A

圖7

書の控で、建武六年の年號をもつものと建武四年のもの、二つのグループに分けられるが、私見によればこれらは全て同筆である。詳細は省くが、「渠」、うかんむりの二畫目をうちこまない「案」、「敢言之」(圖7)をはじめ、いくつも類似點を指摘することができ。そしてこれらの文書の書記官のサインがみな「掾譚」あるいは「掾譚令史嘉」なのである。そこで、毛ノ莚簡とAを比べてみると、「渠」、「市」、「書」(日の上にくる横

書

20(A)

書

45A

書

51A

市

16(A)

市

38A

禮

38A

圖8

畫が一畫少なく、縦畫が日に達する)の諸字やごんべん等(圖8)からも同筆と認められよう。つまり、Aは「掾譚」が書いた可能性が極めて高いのである。

以上のことから、寇恩の冊書については次のように言えるだろう。甲渠候官からの訴えに對する回答として縣から送られてきた寇恩の爰書を、候官ではコピーを作つて榻につけて保管しておいた。ついで第二回目の爰書が送られてきたので送り狀も含めて前回の爰書とともに保管した、と。また先程B・CとDが異筆であろうと推測したが、そうだとすれば郷からの報告を受けた縣が、候官に送達するために郷からの文書のコピーを作成した日及び書記官と、送り狀を書いた日及び書記官が違つていたと想定せざるを得ないだろ

う。

さて、筆跡からは確かにAは候官で作成されたコピーであると思われた。それはB・Cに比べてやや難な書き方であることから裏附られるかもしれない。しかし、なぜコピーをとる必要があったのだろうか。候官からさらにどこかに送付せねばならない文書でもないし、現にB以下は縣からきたオリジナルの文書と考えられるにもかかわらず、Aのオリジナルはどうしたのだろうか。今のところ解答が出せないのだが、それは縣が郷に二度目の驗問をするように言った文書中の「今候奏記府願詣郷爰書是正府録令明處」という、今ひとつ正確な解釋のしかねる文章の意味するところと関係があるかもしれない。

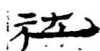
ところで、今みた冊書は候官が受け取ってからどこにも送付せず保存しておく性質の文書であったが、次に、下級官署に送達する場合をみておきたい。

F三・三三(9)をみてみよう。一三三は居延都尉府から甲渠候官に送られてきた文書。内容は社稷の祀に關して、その日程ときちんと取り行かうという命令で、一三三と二三三は日取りを記した牒である。そして一三三は甲渠候官から第四候に對して、同じ内容を下達した文書の控であり、當然候官の書記官が書いたものである。

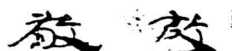
この控と都尉府からの文書は一見しただけで手が違ふことがわかるが、念のためにいくつ相違点をあげると以下の通りである(圖9)。以て控の方は左に三角、右に人を書くが、都尉府の文書では左に底邊のない三角を書いて、右側の人字の一畫目で底邊を作っており、筆法が異なる。社は控では土に點がない。又、都尉府の文書は三畫目がゆったりとしもぶくれになるが、控の方はシャープに左



153(都尉府)



153(都尉府)



154(都尉府)



158(控)



159(控)



159(控)



160(控)

圖9

であるが、AとCには都尉府からの文章が、Dにはそれを受けた候官が(候官の)尉と不侵候長に調査と出頭を命じた文章が書かれている。そしてAとC(「甲渠郵候以郵行」も含む)とDとは手が違ふのである。Dの寫眞がやや見づらいが、例えば(圖10)、渠本の部分の書き方が違ふこと、Dの方は巨の縦畫が木の縦畫と一本になつてゐるようみえる。檄は友の三、四畫目の角度が違ふ。

下方におりる。このように、都尉府の文書と控文書の書き手が違ふことが確認されるが、このことから、上級官廳から文書を受け、それをさらに下級官廳に送達するには、下達文書の控をとり、それをおそらく上級官廳からきた文書のあとに附け加えて編綴し、保管していたと考えられる。このようなやり方は冊書だけでなく、觚でも同様であった。

F三・三三を例にしよう。これはAとDの四面をもつ多面體の觚といわれる木簡で、「甲渠郵候以郵行」と、封泥孔の上に大書されていることから明らかなように、都尉府から甲渠候官に送ってきたものである。檄の傳達が遅れた事件に關して調査を命じた内容

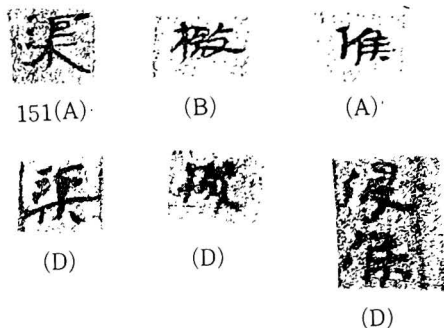


圖10

にんべん…一畫目が、Aは極めて短くまた下におろす角度がゆるやか、などの相違点があげられる一方、特に類似した字は発見できない。つまり、A、B、C面に文章が書かれた觚を受け取った候官は、さらに下級官廳に命令を傳達した際、受け取った觚にもう一面、Dを削りたして、そこに控を書いた、ということである。

このように、どのような形であれ、發信した文書の控を、受信したオリジナルの文書のあとにつけて保管するというやり方が確認できたと思う。とすると、大庭氏によって復元されたあの元康五年詔書冊はどうなのだろうか。あの冊書は候官で出土したものであり、中央から順次送られて候官で受け取った文書と候官から候への發信文書がならんでおり、全簡同筆であった。それらがもし編綴されていたとすれば、それは候に向けて發信されるはずだった冊書が何らかの理由で發信されずに残った、と考えざるを得ないだろう。なぜなら保管用ならば、受信文書と發信文書は異筆でなければならぬのだから。

さて、これまで筆跡という点からみてきたのであるが、ここから

派生する問題点について若干ふれておきたいと思う。

まず第一に、簡の形状について。先程あげた爰書の冊書中のA、即ち候官の書記官が作ったコピーも、社稷の祀に關する内容を下級官廳に送達する文書の控も、これら候官の書記官の手になるコピーは、ともに一行書きの木簡（札）に書かれていた。受信したオリジナルの文書はやはりどちらも二行書きの木簡（兩行）に書かれているのに、である。このことから、コピーの文書は札に書き、正式に發信する文書は兩行に書くという傾向のあったことを想定してよいのではないだろうか。もちろん控は絶対に兩行に書かないとも、正式文書には絶対に札を使わないともいえないが、確かに特に正式な文書に札を用いる例は少ないように思われる。ただ、少なくともここで注意しておきたいことは、從來兩行の簡は、札で書ききれない時に文字数を増やす手段として用いられる、とのみ説明されてきたが、正式文書とそうでない文書とで使い分けがあった、即ち目的や内容によって木簡を使い分けていたということなのである。周知のように木簡には様々な形状があり、巾も廣いものでは7cmほどにもなるし、板状のものだけでなく、多面體の觚やさらに懸泉出土の木簡の中には断面が三角形をなし、その二面に文章を書いた、居延や敦煌では見られなかったような形状の簡もある。これら、簡の形状と内容との関係も今後の課題であらう。

次に署名や日付の問題。文書簡の場合、發信人の名前や日付の墨色が異なる、あるいは手が違ふと思われるものがあるが、これをどう解釋するかということである。これについてはすでに大庭氏が「發信人である高官が…自筆で名前を書くことによって文書を權威づけると共に效力を發生させたのであらう。」という假説を出して

おられる⁽¹⁰⁾。氏が分析対象とされたのは候官出土の發信文書であったが、氏も言われるように、候官出土の候官發信文書の中に實際に發信された文書をみつけ、署名や日付をみようとするのは不可能であるから、文書庫と推定されるF三から發見された受信文書について

今一度みてみよう。F三には上級官廳から受け取った正式文書も保管されているだろうからである。

候官の上級官廳である都尉府から來た文書、六、七、二五、六三をとりあげる(圖11)。これらはみな候官で寫したのではなく、都尉府から來た文書のオリジナルであると考えられるもので、兩行の簡に書かれており、手は各々違うようである。さてこれらの文書の發信人である都尉の名であるが、文章と同筆であると思われる。もしそうならば、都尉が自署したのではなく、都尉府の書記官が都尉の名も含めて全文書いた文書が候官に送られてきたということになる。

一方、候官發信文書の控もみておこう。先にとりあげた元、四、四、四、五、五、五、五である(圖12)。これらの日付や發信人は異筆あるいは墨色が異なっている。即ち控であっても全文書記官が書いた同筆のものではなく、異筆のものがあるということである。つまり、日付や高官の署名は、實際に發信された文書でも書記官が書いたものもあるし、逆に控でも異筆の可能性があるのである。一體どういった場合に同筆あるいは異筆になるのか、日付や署名の有無(正式文書であっても發信人の署名部分が空欄になっているものがある⁽¹¹⁾)及び手の異同と、實際に發信された文書か控文書か、あるいは文書の内容との関連等、これまた今後検討すべき問題であらう。

ただ、この署名や日付の筆の異同の判定は微妙であ

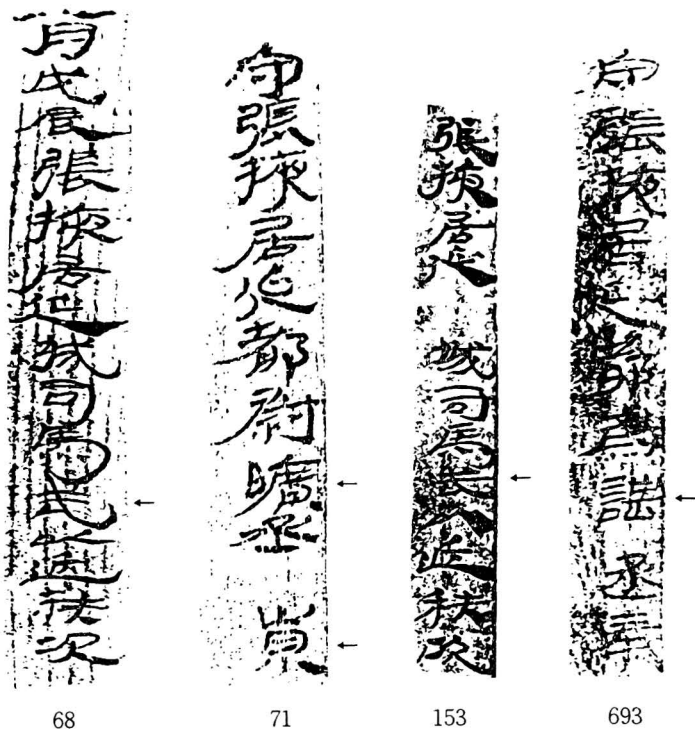


圖11

る。名前はたいてい一文字であるし、日付にしても文字数も畫數も少ないからである。さらに、ここでも墨色の違いが問題になったが、墨色が違うからといってただちに書き手が違うとはいえないのであって、サンプル数を重ねて慎重に行わねばならない。

以上、簡牘研究の問題点と今後の展望を述べた。簡牘資料の充實にともない、それらが様々な方面の研究において盛んに用いられるようになった今日、特に邊境出土簡のように雑多な内容をもち、かつ斷簡零墨の多い資料を扱う場合、簡の性格を知った上で利用するということを再認識する必要があると思われる。簡文を読む際には、單純な思い込みや輕率な類推で解釋するのは危険である。文獻史料では見過ごしても影響ないと思われるような字が、簡牘資料の中では大きな意味をもつ場合もあるのである。また、簡上の記事を

追って關連簡を集めても、そこに正式文書も控も下書きもルーティンワークのものも臨時例外的なものも、ない混ぜになっただけでは正しい結論には至らない。文書の移動、運用を知らねばならないのである。そのためにはなぜ切れ込みがあるか、なぜ巾廣の簡を使うか、なぜあきがあるのか、なぜ色が違うか、といった小さな手がかりをきつかけに一つ一つの問題を解いて積み重ねてゆくしかないのである。法制史をはじめ、簡牘に書かれた記事を使った研究は今後も進展してゆくであろうが、それと同時に簡牘そのものの研究も重視されねばならない。帳簿や文書固有の書式や辭句、それらの移動等に關する従来の研究を新たな資料の出現にともなう批判的に繼承發展させるとともに、例えば簡の形態や書法というような、從來ほとんど取りあげられなかった方面からのアプローチがなされるべき段階にある。そういった研究はまだ始まったばかりであるが、こ



38(部分)



45(部分)

圖12

ここではそのようなアプローチの試みの一つとして筆跡をとりあげてみた。今後、實物をもたないハンディを克服するためにもさらに多角的な研究を進める必要がある。

註

- (1) 「發」が「ひらく」という意味であることは、市川任三「居延簡印章考」(『財団法人無窮會東洋文化研究所紀要』五、一九六四年)に指摘されている。一例をあげると、
(荊)軻既取圖奏之、秦王發圖、圖窮而匕首見。(『史記』卷八六、刺客列傳)
「定」の例としては、
三年、賜食邑四千二百戶。(以下戰功を列舉した後)剖符世世勿絕、定食四千六百戶、號信武侯。…有功、…從擊黥布有功、益封定食五千三百戶。(『史記』卷九八、靳歙傳)
定食という語はこれ以外にも多く檢索できるが、これらは「食邑某戶と決定した」ということではなく、「これまで賜った食邑も計算して某戶と確定した」という意味であろう。
(2) 大庭脩「居延出土の詔書冊」(同氏『秦漢法制史の研究』第二章、一九八二年、創文社)。
(3) 永田英正「居延漢簡の研究」(第一部。一九八九年、同朋舎)。
(4) 爰書に關しては杵山明「爰書新探—漢代訴訟論のために—」(『東洋史研究』第五一卷第三號、平成四年)。
(5) 富谷至「大英圖書館所藏の敦煌漢簡」(『中國中世の文物』京都大學人文科學研究所、一九九三年)。杵山明「刻齒簡牘
初探—漢簡形態論のために—」(『木簡研究』第一七號、一九九五年)。
(6) 以下、筆跡一般、筆跡の不變性の條件及び鑑定方法に關しては、猪刈秀一「筆跡鑑定の要點」(『古文書研究』第二號、昭和四四年。後、『日本古文書學論集I』吉川弘文館、昭和六十二年、に所收)による。なお現在犯罪捜査で行われている筆跡鑑定の方法はこの書で述べているよりもはるかに嚴密なものであるが、寫真しか利用できず、かつサンプル數の限られた簡牘資料を扱うので、ごく基本的な段階の檢討に止めるを得ない。
(7) 冊書はF三・一—三、楊はF三・三。
(8) 譚に括弧をつけたのは、同じく譚というサインをもちながら、手が違ふと思える簡(F三・二四七)の存在の故に、譚という人物が實際に筆をもつて書いたのか、單に名前が使われているだけなのか、若干判斷しかねたからである。ここでは特定の人物を表わすのではなく、單なる記號として使用している。ただ、新簡には「譚」の筆跡と思われるものが相當數含まれており、署名がなくても彼の筆跡はかなり正確に追うことができると考えている。
(9) 二五七と二六は考察の対象から除外する。二六は内容は確かに社稷の祀に關するものだが、文章はどれともつながらず、手も違ふ。また二五七は「九月八日庚辰齋」のわずか七文字でしかも畫數の少ない文字が多く、比較が困難であるが、「齋」字など、むしろ二六に近いと思われるものもあり、ここでは扱わない。

(10) 同氏『漢簡研究』(同朋舎、一九九二年)第六章「文書簡の署名と副署試論」。

(11) 例えば、F三・三と五では縣令の名が空欄になっている。

各々建武三年と建武五年の簡で、ともに丞の名は記されている。